

IMAGE ARTS AND SCIENCES

日本映像学会報 No. 184, 2019

VIEW 展望

日本のテレビ放送はどこに向かうのか／安部裕…2

INFORMATION 学会組織活動報告

機関誌編集委員会…3 映像表現研究会…4-5 映画文献資料研究会…5-6
映像テキスト分析研究会…6 アナログメディア研究会…7-9 アジア映画研究会…9-10
写真研究会…11 中部支部…11-12 第45回大会第2通信…13 総務委員会…14

REPORT 報告

関西支部第85回研究会研究報告／李 昊球…12

FROM THE EDITORS

編集後記…14

「Image Arts and Sciences / 日本映像学会報第184号」2019年1月15日発行
 発行人：武田潔 編集担当／総務委員会：西村安弘（委員長）・橋本英治（副委員長）・
 安部裕・阿部宏慈・岡島尚志

日本映像学会事務局：176-8525 練馬区旭丘 2-42-1 日本大学芸術学部映画学科内
 phone：03-5995-8287 / fax：03-5995-8229 /
 e-mail：JASIAS@nihon-u.ac.jp → office@jasias.jp
<http://jasias.jp/>



日本映像学会

日本のテレビ放送はどこに向かうのか

安部 裕

2018年12月1日、新4K放送が始まった。テレビ放送業界においては2011年7月24日（東日本大震災被災県である福島・宮城・岩手は2012年3月31日）の地上デジタル放送（以下、地デジ）への完全移行以来の大きな出来事だ。

テレビ放送が始まった1953年から、日本のテレビは画面横縦比4:3のアナログ放送であった。2011年の地デジ化で画面の横縦比が16:9に変わったことでテレビは見た目が大きく変わった。今回始まった4K放送の画面横縦比も地デジと同じく16:9である。しかし画面を構成する画素数が変化している。

簡単に説明すると、テレビ放送は一つ一つの画素の点滅で一枚の画面が構成されている。という事は画素の数が多ければ多いほど高精細な画面となる。長らく続いたアナログ放送時代の画素数は横方向が680で縦方向が480（一般のテレビで見える範囲）で約32万画素であった。地デジでは横方向1440×縦方向1080で約155万画素（フルハイビジョンの場合1920×1080で約207万画素）となっている。そして4K放送は横方向3840×縦方向2160で約830万画素もある。アナログ放送と比べておよそ26倍も画素数が増えている計算となる。たった7年でテレビの画面は26倍も高精細になって繊細な映像を映し出すことが可能となった。近い将来には更に画素数の多い8Kの実用化も現実のものとなる。テレビはハード面では著しい進化を着実に遂げている。

1990年代まで、テレビで放送される映像は、プロカメラマンが数百万円もするプロ用のテレビカメラを使って撮影していた。現在もそうなのだが、当時はテレビで放送されるほぼ全ての映像をプロカメラマンが撮影していた。

2000年代に入りSONY製のDSR-PD150（以下PD150）に代表される「業務用小型カメラ」が登場した。このPD150は40センチほどの長さで、幅は十センチ、重さも2キロ弱と従来のテレビカメラの4分の1ほどの軽量で、38万画素の映像を撮影する事が可能だった。また、発売当初の価格が50万円程度とプロ用のテレビカメラの15分の1ほどの値段で購入する事が出来た。結婚式やイベント撮影など、テレビ放送以外の撮影が本来の用途のPD150を始めとする業務用小型カメラが、この頃からドキュメンタリー番組を始めとする実際のテレビ番組の撮影に使われることになっていく。この種の業務用小型カメラは、フォーカスや絞り（アイリス）、ホワイトバランスなど、プロカメラマンが長年かけて体で覚えてきた事が、オート機能である程度出来るようになっていく。2000年以降、撮影のプロではないディレクターやアシスタントディレクター（AD）が業務用小型カメラを持って撮影に行き、その映像を放送する事が多くなってきた。そしてプロカメラマンも業務用小型カメラを使って撮影する機会が増えた。

筆者は1993年からプロカメラマンとしてドキュメンタリー番組や報道・情報・バラエティー番組を撮影していたが、2010年以降はプロ機より業務用小型カメラでの撮影の方が多くなっていった。所属していた会社もフルハイビジョンで撮影ができる業務用小型カメラが発売されたのを機に、大量に購入した。特にキー局のドキュメンタリー番組に関しては、ほぼプロ機を使用せず、業務用小型カメラを使う状況は今も続いている。更に最近は全編に渡ってディレクターやADが撮影をする番組や、重要な時だけプロカメラマンに撮ってもらう、というケースも増えている。

テレビドラマやスポーツ中継、スタジオではプロのカメラマンしか撮影しないが、その他の分野の番組ではもはや「撮影＝カメラマン」ではなくなってきている。カメラの録画ボタンを押せば、誰でも高画質の映像が撮影出来る。以前は、視聴者が見易いように、プロカメラマンが配慮をして撮影をしていた。しかし今は全体を映しておけば編集でズームアップをする事も出来る。また映像がブレていても多少の補正は出来るし、テロップを多用して元画面がブレているのが分からないようにする事も出来る。そして何より視聴者が、撮影のプロではないディレクターやADが撮影した映像を不自然と思わなくなってきているのだ。

筆者は2014年までプロカメラマンだったので、カメラマンの肩を持つ訳ではないが、レンズの使い方や効果的に魅せるアングル、ズームやパンのタイミングなどはディレクターやADなど訓練されていない人に撮れるものではない。またレンズ交換などが出来ない業務用小型カメラでは、従来のプロ機のような撮影効果も十分には得られない。結果的に映像を編集で誤魔化す番組が増えていることは否めない。

昨今のテレビ番組を見ていると、明らかにプロカメラマン以外が撮影した映像が増えている。また新しい映像文化でもあるYouTubeなどもYouTuberの誕生により、プロとしての訓練を受けてない人たちが撮影をし、編集をし発信している。そしてそんな映像を見ることに視聴者も慣れてきている。見にくい映像だと感じなくなってきているのだ。

2018年12月に始まった高画質・高品質の新4K放送。放送が始まった20日後、筆者の講義を受けている放送学科の学生100人に新4K放送を見たことがあるか聞いてみた。将来プロカメラマンやディレクターを目指す学生も多いのだが、2人しか見ていなかった。一般社団法人放送サービス高度化推進協会が12月1日に公表した資料¹では、2018年11月の段階で4Kテレビを持っている人の割合は5.8%となっている。この数字は「積極的に見たい番組がない」ということなのだと推測できる。日本のテレビ放送はハード面が進みすぎていて、ソフト面が追いついていない、という事だけは確かかなようである。

¹一般社団法人放送サービス高度化推進協会

4K・8K放送市場調査結果のまとめ（2016年9月～2018年11月の5調査回分）

https://www.apab.or.jp/release/pdf/release_181201_01.pdf

（2018/12/19 閲覧）

（あべ ゆたか／東部支部、日本大学芸術学部放送学科）

機関誌編集委員会

古賀太・木下千花

『映像学』第102号より、投稿規定の「4. 体裁」と「5. 提出方法」を次のように改訂いたします。

【旧 投稿規定】

『映像学』投稿規定（2017年6月改正）より抜粋

4. 体裁

(1) 完成原稿であること。

(2) 原則としてワープロ印字原稿で、A4サイズ、横書き。

(3) 典拠明記や文献リストの方法は、所定のスタイル・シート（学会ウェブサイトからダウンロード可能）に従う。

(4) 原稿本体には執筆者名は記さない。

(5) 別紙の「連絡票」（書式は自由）に、題名、執筆者名、住所、電話番号、Eメールアドレス、所属等を記して同封すること。なお、編集委員会が原稿を確認してから3日以内に事務局からEメールで「原稿受付」の通知をするので、Eメール以外での連絡を希望する場合は、その旨、連絡票に明記すること。また、採否の通知は、連絡票に記された住所宛に郵便で発送する。

5. 提出方法

(1) 紙にプリントアウトした原稿と電子データの双方を提出すること。

(2) プリントアウトは正副計4部を下記の事務局宛に、書留または宅配便など配達記録が残る手段で送付すること。電子データは、「連絡票」にOSの種類とソフト名を明記し、CD-Rなど書きができない電子記録メディアを原稿と同封するか、メール添付で事務局に送信すること。なお、提出された原稿などは返却しないので控えを取っておきたい。

6. 投稿先

〒176-8525 東京都練馬区旭丘2-42-1

日本大学芸術学部映画学科内 日本映像学会『映像学』編集委員会

E-mail: jasias@nihon-u.ac.jp

【新 投稿規定】改訂項目には★

4. 体裁

(1) 完成原稿であること。

★(2) 原則としてPDFデータで、A4サイズ、横書き

(3) 典拠明記や文献リストの方法は、所定のスタイル・シート（学会ウェブサイトからダウンロード可能）に従う。

(4) 原稿本体には執筆者名は記さない。

★(5) 別ファイルの「連絡票」（書式は自由）に、題名、執筆者名、住所、電話番号、Eメールアドレス、所属等を記して論文と同時に送信すること。なお、編集委員会が原稿を確認してから土日祝日を除く3日以内に事務局からEメールで「原稿受付」の通知をする。また、採否の通知は、連絡票に記された住所宛に郵便で発送する。

5. 提出方法

★PDFデータをメール添付で提出すること。

6. 投稿先

★eizogaku@jasias.jp

※規定の全体につきましては、日本映像学会ホームページ (http://jasias.jp/journal/image_arts_sciences/instructions_ias) にてご確認くださいことができます。

(こがふとし／機関誌編集委員長・日本大学芸術学部
きのしたちか／機関誌編集副委員長・京都大学大学院人間・環境学研究科)

映像表現研究会

伏木 啓・伊奈 新祐・奥野 邦利

「映像表現研究会」報告と計画について

第12回となる「インターリンク：学生映像作品展：ISMIE(Interlink=Student's Moving Image Exhibition) 2018」は、10月28日(日)の名古屋会場を皮切りに、11月17日(土)京都会場、12月1日(土)、2日(日)は東京会場と3つの会場を巡回しました。以下に各会場の様子を報告します。今回は全国20校の映像メディア系大学及び専門学校の学生作品を、会員による推薦をもって上映しました。

<参加校> 愛知淑徳大学/イメージフォーラム映像研究所/大阪芸術大学 芸術学部/九州産業大学 芸術学部/京都精華大学 芸術学部/久留米工業大学 情報ネットワーク工学科/尚美学園大学 芸術情報学部/情報科学芸術大学院大学 [IAMAS]/椋山女学園大学 文化情報学部/成安造形大学 情報デザイン領域/宝塚大学 東京メディア芸術学部/玉川大学 芸術学部 メディア・デザイン学科/東京工芸大学 芸術学部/東京造形大学 造形学部 デザイン学科 映画専攻/東北芸術工科大学 映像学科/名古屋学芸大学 映像メディア学科/日本工業大学 情報工学科/日本大学 芸術学部/文教大学 メディア表現学科/北海道教育大学

◎インターリンク：学生映像作品展 (ISMIE) 2018 <名古屋会場>
10月28日(日)

今回の名古屋会場は、ムービング・イメージ・フェスティバル (MIF) 2018 と銘打ち、ISMIE、ICAF、名古屋特別プログラムといった、複数の映像祭を連続させて上映する機会となりました。会場は、昨年度同様、愛知芸術文化センターのホールをお借りすることができ、恵まれた上映環境で実施できました。愛知県美術館主催の映像祭「アートフィルム・フェスティバル」と同時開催ということもあり、大学関係者だけではなく、一般の方々にも多くご覧いただくことができたように思います。ISMIEは、10月28日(日)に実施しました。13:30より代表作品プログラムI、14:50より代表作品プログラムIIを上映しました。代表プログラム上映後は、公開トークとして、愛知県美術館主任学芸員の越後谷卓司氏とともに、推薦教員である阿部卓也氏(愛知淑徳大学)、伊奈新祐会員(京都精華大学)、齋藤正和会員(名古屋学芸大学)、須藤信会員(愛知淑徳大学)、前田真二郎会員(情報科学芸術大学院大学)、宮下十有会員(椋山女学園大学)、そして司会として伏木啓(名古屋学芸大学)によるトークが行われ、出品作品に関する所感や、今回の作品から見える映像教育の現状について議論が交わされました。また、公開トーク終了後、「名古屋特別プログラム」として、参加校による代表作品以外の作品や、近隣大学の作品を上映する機会も持ちました。代表作品プログラムと公開トークで、延べ167名の方にご来場いただきました。

(ふしき けい/中部支部)



(写真1) トークセッション：愛知芸術文化センター



(写真2) 会場風景：愛知芸術文化センター

◎インターリンク：学生映像作品展 (ISMIE) 2018 <京都会場>
11月17日(土)

本年も例年の「KINO-VISION」(旧・京都メディアアート週間)の上映会(11月16日(金)17日(土)18日(日)の三日間。会場：Lumen Gallery(下京区麩屋町五条上る))の中で映像表現研究会が主催する「インターリンク=学生映像作品展 (ISMIE2018)」を上映しました。各校代表作品プログラムを上映後、ミニ・トークセッションも行いました。

<KINO-VISION>全体のプログラムは「インターリンク=学生映像作品展 (ISMIE2018)」とアニメーション学会等が主催する「インターカレッジ・アニメーション・フェスティバル (ICAF2018)」の選抜作品集、および(社団法人)ナレッジキャピタルが主催する「学校推薦・教員推薦による学生映像作品のコンペ<ISCA2017>」の入選入賞作品集を含む内容でした。ここ1~2年における全国の短編作品・アニメーション作品を中心に学生映像作品を一望できる機会となりました。

11月17日の各校代表作品プログラム上映後、出品者4名による自作の説明に続き、「ミニ・トークセッション」を行いました。推薦教員の大橋勝会員(大阪芸術大学)、アニメーション学会の会員でもある森下豊美会員、そして進行を伊奈新祐(京都精華大学)が担当しました。ISMIE2018を見ての所感、ICAF2018の作品との比較など意見交換しました。入場者数は、17日(土)の3プログラムで合計71名の参加者がありました。

(いな しんすけ/西部会代表)



(写真3) トークセッション：京都・ルーメンギャラリー



(写真5) 基調報告：伊奈新祐会員



(写真4) トークセッション：左から伊奈、森下、大橋。



(写真6) 公開ディスカッション：左から伊奈、奥野、須藤、相内、川口、野村、竹林、村山。

◎インターリンク：学生映像作品展（ISMIE）2018 < 東京会場 >
12月1日（土）、2日（日）

東京会場は昨年同様に、日本大学芸術学部江古田校舎大ホールでの12月開催となりました。9日（土）は、13:00～15:40に各校10分以内（2作品以内）又は10分以上20分以内（1作品）で選抜された参加20校の代表作品プログラムを上映し、16:00～18:00には伊奈新祐会員（映像表現研究会代表）による基調報告「モーショングラフィックスの歴史」の後、そのテーマに沿った公開ディスカッションを作品推薦教員によって実施しました。なお、公開ディスカッションの報告は次回会報にて行う予定です。

パネラー：相内啓司（京都精華大学）、伊奈新祐（京都精華大学）、川口肇（尚美学園大学）、須藤信（愛知淑徳大学）、竹林紀雄（文教大学）、野村建太（日本大学）、村山匡一郎（イメージフォーラム映像研究所）
司会：奥野邦利（日本大学）。

翌10（日）は、11:00～17:30に各校25分以内で推薦された全作品を、A～Dの4つのプログラムで上映しました。両日の入場者数は約150名。詳しい上映作品については以下のホームページを参照して下さい。

< http://d.hatena.ne.jp/e_h_kenkyu/ >

（おくのくにとし／東部会代表）

Image Arts and Sciences 184 (2019)

東部支部

映画文献資料研究会

西村安弘

2018年10月6日（土）15:00～16:30、東京工芸大学芸術学部 中野キャンパス1号館1階ゼミ室7にて、下記のように第45回映画文献資料研究会を開催しました。

「スタインベックなんか知らない 『ロング、ロングバケーション』におけるアメリカ旅行」

発表者：西村安弘（東京工芸大学）

発表概要：『ロング、ロングバケーション』The Leisure Seeker（2017）は、アメリカ人作家マイケル・ザドウリアンの小説『旅の終わりに』（原題はThe Leisure Seeker）を、イタリア人監督のパオロ・ヴィルズィが映画化したものである。原作では、認知症の老夫（ドナルド・サザーランド）と末期癌の老妻（ヘレン・ミレン）がキャンピング・カーに乗って、

Image Arts and Sciences 184 (2019)

東部支部

映像テキスト分析研究会

藤井仁子

ディズニーランドを目指して旅立つ。二人の旅は、ジョン・スタインベックが〈マザー・ロード〉とも〈アメリカのバックボーン〉とも呼んだルート66の足跡を辿るもので、スタインベックの『怒りの葡萄』やキャロル・オコネルの『ルート66』（原題はShark Music）など、同趣向の多くのアメリカ文学の系譜に連なる小説として位置付けられるだろう。

映画化を手がけたパオロ・ヴィルズィは、映画実験センターでスカルペリに師事し、デビュー作の『美しき人生』La bella vita (1994)以降、出身地のトスカーナを舞台とする一連の喜劇で、イタリア式喜劇の後継者として目されている。ヴィルズィが本国イタリアを離れたのは、シチリアの若者がアメリカ女性を本国まで追って行くロード・ムービー『マイ・ネーム・イズ・タニーノ』My Name Is Tanino (2002) 以来のことである。この作品が外国人の視点から移民問題を喚起するものだったのに対し、再びアメリカ大陸を舞台にした『ロング、ロングバケーション』は、英語圏の俳優（サザラードとミレン）を起用し、原作小説に倣ってアメリカ人の視点を採用する一方、ルート66を辿る旅を、ヘミングウェイ博物館のあるフロリダへ南下する旅程へと変更してしまった。設定上のこの大幅な変更は、移民の築き上げたアメリカの歴史を後景化する一方、イギリス人夫婦がナポリを旅するロベルト・ロッセッリーニの『イタリア旅行』Viaggio in Italia (1954) への言及でもある。

コレットの『いさかい』を下敷きにすることで始まった『イタリア旅行』は、原作の映画化権を獲得することに失敗したため、作家のヴィタリアーノ・プランカーティが呼び出されて、脚本の変更にとらされた。撮影中にシナリオが未完成だったと言われる『イタリア旅行』は、ジェイムズ・ジョイスの小説『ダブリン市民』中の最終話「死者たち」を参照することになる。『いさかい』が妻の不倫が原因で自殺する夫を描いたのに対して、「死者たち」は結婚以前に妻に恋愛感情を抱いていた若者が病死していたことで、夫が嫉妬心をかきたてられる。『イタリア旅行』では、ヴェスヴィオ火山を臨む屋敷のテラスで、ジョイス夫妻（ジョージ・サンダースとイングリッド・バーグマン）が交わす会話の場面として、類似した状況が繰り返される。この映画のクライマックスは、宗教行列で引き離された二人がお互いを再発見する奇跡する〈エピファニー〉の場面、雪の降りしきる夜に夫が眠っている妻への愛を再確認する「死者たち」の結末と重なっている。

映画版『ロング、ロングバケーション』では、高校の英語教師である夫が妻の昔の恋人に嫉妬心を抱き、「死者たち」のヒロインの名前（グレタ）で妻を罵る。しかし、痴呆で混乱した夫の台詞があきらかにするのは、実際に不倫をしていたのは彼自身であることが明らかになる。狂気こそが真実を明らかにするという倒錯した作劇法は、ルイジ・ピランデッロ以来の伝統であるだけでなく、ジョイスの「死者たち」やロッセッリーニの『イタリア旅行』の世界を揺るがしながら、最終的には妻が夫の愛情を確認し、最後の決断を下すことで再び世界が確固たるものとして定立するのである。

ヴィルズィの前作『歓びのトスカーナ』La pazzia gioia (2016) が精神病院から脱走した2人組の逃避行であったように、『ロング、ロングバケーション』は老人介護及び終末医療施設からの解放を求める老人の闘争の旅でもある。1978年に公布された通称〈バザリア法〉によって、精神科病院の廃絶へ向かったイタリア社会から、トランプ大統領の演説が流れるアメリカ社会へと向けられたメッセージは、果たしてどれだけ理解されたのであろうか。

(にしむら やすひろ／映画文献資料研究会代表、東京工芸大学)

活動報告

2018年度第1回（通算第18回）研究発表会は9月22日に早稲田大学において開催されました。発表者は川崎佳哉会員（早稲田大学）、題目は「奥行きという「闇の奥」——『市民ケーン』のスクリーンをめぐる」でした。以下、発表者による報告です。

*

本発表では、今日では映画史上の傑作として知られているオーソン・ウェルズの『市民ケーン』（1941）について、その生成過程に注目しつつ従来とは異なる観点から新たな光をあてることを試みた。とりわけ重要なのは、1939年にハリウッドにやってきたウェルズが、ジョゼフ・コンラッドの小説『闇の奥』の映画化を企画していたことである。ウェルズは一人称小説である原作を主人公の視点から＝一人称カメラによって撮影するという構想を持っていた。本発表は、この『闇の奥』の映画化企画とその『市民ケーン』への影響について考察することによって、これらを通してウェルズがスクリーンと観客との関係を変革することを試みていたと論じた。

まずは、ハリウッドにやってくる以前のウェルズが演劇人として活動しており、観客との関係という点で映画を演劇とは根本的に異なるものと考えていたことを確認した。観客との共同体的な経験が演劇の根幹を成すのに対して、作り手から顔が見えない匿名の大衆である映画観客は、スクリーンによって映画の世界から決定的に隔てられており、その意味でウェルズにとって存在しないも同然と考えられていた。『闇の奥』における一人称カメラは、この「観客の不在」という問題に対する解決策として導入される予定であったと考えられる。一人称カメラについてウェルズ自身が解説をする予定であったイントロダクションを資料から検討することによって、ほぼ全編を主人公の視点から撮影するというこの映画の構想は、観客があたかもスクリーンなどないかのようにイメージと向き合うことを可能にするもの、すなわちスクリーンを排除することを目的としたものであったと論じた。そして、このスクリーンの排除こそが、『市民ケーン』に受け継がれたものであったことをテキスト分析によって明らかにした。冒頭に置かれたニュース映画のシーケンス、とりわけその終わり方は、それまでニュース映画を上映していたスクリーン自体を映し出すことによって、あたかもそこで映画の上映が終わったかのような印象を観客に刻み込む。そして、『市民ケーン』について頻繁に言及されてきた奥行きの問題は、まさにこのスクリーンの排除、すなわち平面性の否定として理解し得ると主張した。

参加者の方々からは多くの有益なご意見をいただき、ウェルズにおける「見ること」に対するある種の不信、映画に対するその独自の姿勢が質疑から浮かび上がってきたように思われる。

*

本研究会は2018年度中にと1回の開催を予定していますが、次年度以降の発表希望も随時承っております。発表を希望される会員は、運営担当（木村建哉会員、中村秀之会員、長谷正人会員、藤井）までお届出ください。

(ふじい じんし／映像テキスト分析研究会代表、早稲田大学文学学術院)

Image Arts and Sciences 184 (2019)

東部支部

アナログメディア研究会

太田 曜

活動報告

- 1: “遂行的映画” 奥山順市の世界
- 2: はらっぱ祭り 映像インスタレーション&ワークショップ

1: “遂行的映画” 奥山順市の世界 アナログメディア研究会主催

9月22日土曜日、小金井 宮地楽器ホール（市民交流センター）地下1階 練習室2・3で行った。

作品上映、研究発表、ライブパフォーマンス、トーク、と奥山順市の仕事について総合的に捉える企画だった。映像学会会員、一般など40名近い入場者があった。

第一部 作品上映 研究発表

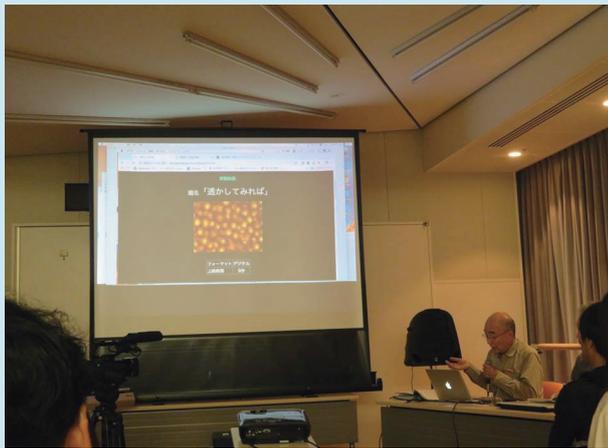
- 1: 奥山順市 実験映画作品上映 全て16ミリフィルムでの上映
- 『No Perforations』1971年
- 『紙映画 (PAPER FILM)』1972年
- 『我が映画旋律 My Movie Melodies』1980年
- 『浸透画 (Osmography)』1994年
- 『時の流れに乗せて (MY SELF TIMER)』1997年
- 『まぜるな (MAZELUNA)』2008年

2: 奥山順市の仕事について研究発表

2018年3月13日フランス 国立文書館（パリ第8大学主催）で行った研究発表の日本語版

奥山順市とその時代 石井満（尚美学園大学教授）

奥山順市の仕事 太田曜（実験映画制作・研究）



研究発表 太田曜

第二部 ライブパフォーマンス/トーク

3: 奥山順市 ライブパフォーマンス 約10分

■ 1975年初演（再演）

「Human Flicker・映画誕生」16ミリ映写機 × 2台 4分



■ 2018年度新作ライブ作品

『フレームレス スーパー8/Live』16mm&スーパー8mm /3分



映写機1台、スーパー8mm映写機1台、計2台の映写機を使用
『歩くスクリーンと人力映写機』16mm /3分
2016年『歩くスクリーンと人力のカメラ映写機』の姉妹作品



4: トーク「古いメディアと新しいアイデア」

平方正明 (元東京都写真美術館学芸員・奥山順市展担当)

よこえれいな (東京大学大学院学際情報学府メディア論研究 映像学会 会員 アナログメディア研究会)

司会 太田曜 (実験映画制作・研究 映像学会会員 アナログメディア研究会代表)



トーク、左から太田曜 (司会) 奥山順市、平方正明、よこえれいな。

まとめ: 奥山順市は言うまでもなく日本を代表する実験映画の作家だ。これまでも多くの個展上映、特集上映、ライブパフォーマンス、展示、トークが行われてきた。しかし、その作品、仕事に関しての“研究発表”を絡めた上映、パフォーマンス企画は知る限り行われていない。今回の企画は映画作品の幾つかを時系列で見て、仕事についての研究発表を聞き、旧作と新作の本人によるライブパフォーマンスを体験し、更に本人を交えての鼎談、トークを聞く、と多角的に奥山順市の仕事について知ることが出来る映像学会の研究らしい企画であった。アナログメディア研究会では今後も作品の上映、紹介に止まらない実験映画 (作家) の研究活動を続けていきたい。

2: はらっぱ祭り 映像インスタレーション&ワークショップ アナログメディア研究会協力 8ミリフィルム小金井街道プロジェクト主催

フィルム (8mm,16mm) で映像インスタレーションを作るワークショップ。フィルムで作られた映像インスタレーションを第30回武蔵野はらっぱ祭りで上映、公開。

① 10月7日 日曜日 W.S. 第一回 映像インスタレーションについてレクチャー。撮影機材の使い方、撮影機材貸し出し。その後は 武蔵野公園 はらっぱ祭り会場下見。

場所: 東センター 公民館東分館

② 10月21日 日曜日 W.S. 第二回 撮影したフィルムの自家現像 8mm,16mm,モノクロ。

場所: きたまちセンター 公民館貫井北分館 創作室



③ 10月28日 日曜日 13時から18時

W.S. 第三回 フィルムをループにしてインスタレーションに。 映写機、編集道具などの使い方。

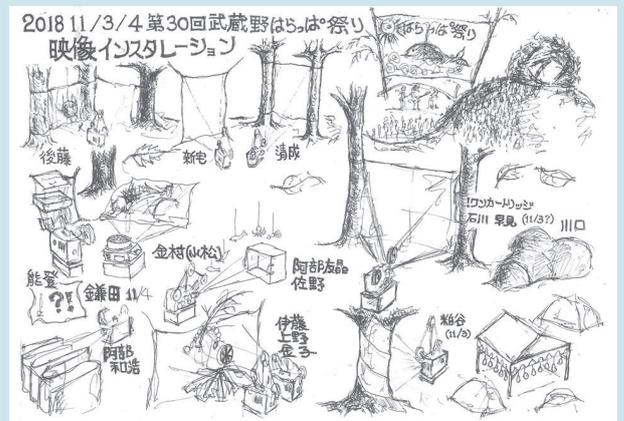
場所: きたまちセンター 公民館貫井北分館 創作室



フィルム編集、ループ作成

④ 11月3日 土曜日、4日 日曜日 武蔵野公園 第30回武蔵野はらっぱ祭り

はらっぱ祭り、映像インスタレーション本番。W.S. 参加者はここで作品を発表。映像インスタレーションでこの時だけ参加の作家もあった。また3日 土曜日には Spicefilms が企画した『! 8』番外編! ワンカートリッジの上映も行われた。



映像インスタレーションで遊ぶ子供

東部支部

アジア映画研究会

石坂 健治



ワンカートリッジ 上映準備中

まとめ：毎年研究会の協力事業として行なっている“はらっぱ祭り映像インスタレーション&ワークショップ”だが、今年も新たな参加者を迎えて無事行われた。映像インスタレーションには能登勝のようなベテランの作家から、今年初めてワークショップに参加した受講者までフィルムを使ったインスタレーション作品を作り、上映・展示した。ワークショップに今年も新しい参加者がいると云うことは、フィルムでの作品制作に関心を持つものが少なからず存在すると云う事だ。この企画はそうした新旧のフィルムに関心を持つ者の交流、情報交換の場にもなっている。映像のメディアがデジタル一辺倒になりつつある今、この企画は世界的にも非常にユニークなフィルムだけでの、集団で行う屋外での映像インスタレーションとなっている。

(おおた よう/アナログメディア研究会代表、
東京造形大学 非常勤講師)

アジア映画研究会 報告

第2期第7回(通算第25回)例会

日時：2018年10月3日(水) 18:00～20:00

会場：国際交流基金・御苑前オフィス7階アジアセンター

座長：松岡環(インド映画研究者・字幕翻訳家)

内容：

①「字幕は映画のストーリーを変えるか?～サタジット・レイ監督作『チャルラータ』の字幕をめぐる」

ゲスト/発表者：大西美保(字幕翻訳家) 30分+討議

②「南インドの神話映画——その歴史、ジャンル、地域特性」

ゲスト/発表者：安宅直子(南インド映画研究者) 40分+討議

①の発表者は、『チャルラータ』が1975年の日本初公開から40年たった2015年に再上映された時、字幕の監修を担当した。その折、1975年版の字幕に何か所か誤訳があることに気づき、当時の関係者や資料にあたって初公開時の字幕作成過程を調査した、その報告である。日本はおそらく、世界で最も字幕文化(技術も含む)の発達した国であると思われるが、映画研究の中で字幕に関する考察が取り上げられることはごくまれである。従って誤訳は、字幕翻訳者があとになって気づく程度なのだが、今回の報告では興味深い事実が判明した。初公開時の『チャルラータ』の字幕には、これまで一切字幕翻訳者のクレジットが付けられていなかったのだが、今回の調査で日本語字幕の手書き原稿を見た関係者は、「清水俊二氏の字だ」と断言したのである。その関係者の話では、当時届いたのは英語訳台本のみで、プリントをテレシネする技術も一般的ではなかったため、プリント上映時の音声をカセットテープに録音し、それをネイティブの女性に聞いてもらって、英語から作られた日本語字幕の監修作業を進めたという。参加者からは、「不十分なやり方だったため、清水俊二氏自身が自信を持てず、自分の名前を残さなかったのではないか」という意見も出て、40数年後の謎解きとなった。その他字幕に関する一般論として、「もともとわかりにくい内容を、わかりやすい字幕にしてしまう権限が字幕翻訳者にはあるのか」といった問題提起もあって、まだまだ議論を深めていけそうな発表テーマとなった。

②の発表者は、長年南インド映画(タミル語、テルグ語、カンナダ語、マラーヤラム語の映画)の研究を続けており、その中でも特異な作品群と言えるヒンドゥー教神話に基づく「神話映画」を概観した。サイレント期から現在に到るまでの神話映画の歩みがヒンディー語、テルグ語、タミル語映画それぞれで検証され、「ミソロジカル(神々と英雄たちの物語)」と「バクティ=デヴォーションナル(聖者伝)」というジャンル分けの解説、さらにはダイアナ・エックの「ダルシャン(神を見ること/神から見られること)論」を元にした、「可視」的存在であるヒンドゥー教の神々に関する映像表現の紹介など、これまでになくテーマと映像に触れて、参加者は興奮気味であった。特に、「バクティ」映画である2017年のテルグ語映画『ヴェンカテシュワラ神に帰依す』の映像は参加者を圧倒し、討議の時間が取れなかったこと相まって、再度の登壇を希望する声が多数上がった。後日、再度の発表と討議の機会をぜひ設けたい。(松岡)

東部支部

写真研究会

前川 修

第二回目（本年度第一回）の写真研究会を9月12日（水）に開催いたしました（於：早稲田大学）。報告者とタイトルは以下の通りです。

.....

報告 1

ゲスト／松井奈菜子（早稲田大学 文学研究科修士課程）
「地球表象と写真」

報告 2

ゲスト／北澤周也（沖縄県立芸術大学 芸術文化学研究科博士後期課程）
「東松照明と『日本』（1967年）—「群写真」概念の誕生と発展を辿る、遡及的読解の試み—」

報告 3 孫沛艾（明治大学 理工学研究科博士後期課程）

「菅木志雄の「写真」について」

.....

19世紀以来の地球表象と写真、1970年の東松の群写真概念、菅木志雄の実践と写真というように多様なテーマでの3つの発表でしたが、活発な議論が行われました。

報告1では、地球への垂直的眼差しの成立とそれに映しかえされる私のイメージという問題構制が、言うまでもなく、ドローンや無人機の視覚とそれを見る私たちの親密な眼差しとつながる問題であることが明らかになり、報告2では、組写真に対する「群写真」がその豊かな多義性の背後に空虚な中心を支えていること、これを当時のメディア間の横断性へ開く読みが必要であることが確認され、報告3では、菅の作品写真がただの「もの写真」ではなく、仮設的で離散的で関係的な作品そのものの存在論的な両義性や矛盾を増幅するための、それ自身、実践の媒質であることが鮮鋭になったのではないかと思います。前回と同様に、写真が覆う圏域の広さ、そこから写真研究はつねにスタートする必要性を強く感じた研究会になりました。

なお、発表要旨は以下のホームページをご覧ください。

<https://sites.google.com/site/jasiasshaken/>

また、第三回研究会は3月に関西での開催を予定しています。全国の写真研究をされている若い研究者の方々の発表申込を随時募集しております。

発表の条件は以下の通りです。

研究発表時間：45分程度

発表内容：写真に関する研究発表であれば、申込資格があります。

（学会員であるか否かは問いませんが、日本映像学会への入会をお勧めします。）

（発表の可否については、運営構成委員等で検討させていただきます。）

申込方法：要旨（A4一枚程度）を添付して

代表者（前川：bqv06466@gmail.com）に発表希望メールをお送りください。

上記の発表の可否および開催時期の調整など、折り返し連絡させていただきます。

よろしくお願ひ致します。

（まえかわ おさむ／写真研究会代表）

支部・研究会だより

中部支部

前田 真二郎

中部支部報告

<報告>

中部支部では、2018年11月10日に、第1回研究会を、名古屋大学映像学分野・専門による国際ミニカンファレンス「ワールド・シネマの新天地」との合併企画として開催しました。同時通訳で行われた招待講演、2件の研究発表は共に質疑応答も活発で充実した内容となりました。参加人数も66名と盛況でした。

研究会開始前に705教室にて第1回幹事会を開催しました。今期の支部役員メンバーの確認、特に、新たな監査就任の承認（※）を行いました。（※名古屋芸術大学 茂登山清文教授）

また、今期の第2回、第3回研究会の開催校の確認をしました。

研究会終了後は同会場にて支部総会を開催しました。昨年度の支部予算の決算報告を行い、支部役員メンバーを、理事、監査含めて紹介し、承認を得ました。

<第1回研究会概要>

2018年度 | 中部支部 | 第1回研究会

日時：2018年11月10日（土）15:10より

会場：名古屋大学（東山キャンパス）文系総合館7階カンファレンスホール
（〒464-8601 愛知県名古屋市千種区不老町）

◎スケジュール

15:10-15:15 日本映像学会中部支部理事挨拶

15:15-15:45 研究発表：馬定延（マ・ジョンヨン）会員
（明治大学特任講師）

15:45-16:15 研究発表：洞ヶ瀬 真人会員
（中部大学人文学部非常勤講師）

16:30-18:00 招待講演：トマス・エルセサー氏
（アムステルダム大学名誉教授）

18:00-18:20 支部総会

◎招待講演

Transnational Cinema or World Cinema: Why Filmmakers Find Themselves Serving Two Masters

トランスナショナル・シネマ、またはワールド・シネマ：映画制作者はどうして二人の主人に仕えることになるのか

トマス・エルセサー氏（アムステルダム大学名誉教授）

Abstract:

My lecture proposes the term "transnational cinema" and considers its typical features from several different perspectives: first, as a notion that competes with other terms which also want to characterise non-Hollywood cinema, such as 'world cinema', 'independent cinema', 'accented cinema', 'peripheral cinema'. Despite being itself a problematic concept, to my mind, transnational cinema best represents the situation of contemporary filmmaking under conditions of globalisation. Second, transnational cinema highlights the challenges, contradictions and possibilities inherent in its presence at the main site of encounter and exchange: the international film festival circuit. Third, transnational cinema helps us understand the changes brought by the digital turn to non-Hollywood filmmaking, and thereby redefines what we mean today by 'national cinema', 'auteur cinema' and the 'cinema of small nations'.

アニメーション作画の為の 人体立体構造のマニュアル

李 良俸

トマス・エルセサー氏プロフィール

Thomas Elsaesser / アムステルダム大学名誉教授 50年間のフィルム・スタディーズの歴史のなかで、もっとも影響力のある研究者の一人。数々の受賞に加え、その功績はオランダ獅子勲章(2006年)やプリティッシュ・アカデミー客員会員(2008年)で認められている。日本語に訳されているものに、『現代アメリカ映画研究入門』(共著)水島和則訳、『響きと怒りの物語 ファミリー・メロドラマへの所見』石田美紀・加藤幹郎訳、『新』映画理論集成1 歴史/人権/ジェンダー』所収など。

◎研究発表(2件)

ピヨンド・シネマ:現代美術におけるスクリーン・プラクティス
馬定延(マ・ジョンヨン)会員(明治大学特任講師)

要旨:

現代美術におけるスクリーンは単なる上映装置を超えて、展示環境の物理的条件を構成する作品の一部であり、それゆえ二次元の平面よりは三次元の空間概念として捉える必要がある。本研究発表では、拡張されたスクリーンの概念を通じて、ホワイト・キューブとブラック・ボックスという展示空間とそれにまつわる美術の制度、イメージの生産、複製、共有、記録、保存に関わるテクノロジーと芸術表現の歴史、そしてそれらによって変容する観客性について考察する。

テレビ時代のメディア環境と水俣病ドキュメンタリーの映像表現
一熊本放送初期作品を中心に

洞ヶ瀬 真人会員(中部大学人文学部非常勤講師)

要旨:

土本典昭の水俣関連ドキュメンタリー映画は、高度な表現を用いて目に見えない公害被害や犠牲者の苦悩を巧みに具象化していた(Marran 2017, 中村 2010)。だが、こうした映像表現は、1960~70年代のテレビドキュメンタリーも広く共有する特徴である。それらは、土本に匹敵する巧妙さで安易な被害者後援を超越し、水俣病事件が抱える複雑な内情を描出する。本発表では、地元の熊本放送作品を題材に、水俣病の社会背景とテレビ時代のメディア環境との狭間で、こうした新しいドキュメンタリー表現がどのように生じていたのかを考察したい。

以上



中部支部第1回研究会 招待講演でのトマス・エルセサー氏

(まえだ しんじろう/中部支部担当常任理事、情報科学芸術大学院大学)

「研究紹介」

この研究は、初心者用の人体解剖学書籍であり、私が絵を学ぶ中、感じた人体解剖学入門の難しさやアニメーション専攻時に思った人体構造の理解の必要性を元に、初心者に分かりやすく人体の立体構造を伝える資料を目標に、修士課程で取り組んだ研究です。

基本的に2冊構成となっており、既存の人体解剖学の書籍とは違って、男女の差や比例筋肉の役割などの情報は全部排除し、ただ、人体の立体構造にだけフォーカスを置き直観的でシンプルな構成として制作されており。また、他の書籍やインターネットなどで得られる資料とも連動出来るようにし、この書籍の内容補完や初心者がもっと的確に立体構造理解を深め、自然に次の段階にステップアップ出来ることを目的としております。

博士課程では、資料の性格が強く初心者に伝わりにくかった所を部分的に改善し、教育教材として制作方向を固め、シリーズ化を目標としております。「基礎編→立体構造編→動き編」のように分ける予定であり、修士での研究書籍は立体構造編に入る予定であります。

「研究をして来て」

この研究の発端は10数年前、私が人体解剖学を初めて接してからです。当時、様々な書籍を購入し勉強してましたが、骨に絡み合った筋肉の立体構造の理解に一番苦労しました。そこから、初心者にも分かりやすく人体立体構造を説明した資料があればと思い、大学に入ってから、不器用ながらも自分の考えや資料などを作って、大学で様々な人達に見せながら話し合いました。最終的にその積み重ねが、大学院で研究し資料本制作する事にまで繋がったのです。もちろん、専門的な書籍に比べると未熟な所も多いと思うのですが、この研究をして来て良かったのは、私自身が絵を描き始めてから今まで様々な苦労し経験した事が、実際今、初心者の方々に役に立っている事です。これからも、この研究を深めもっと良い物に仕上げていきたいと思っております。

「発表の準備」

今回の発表が決まったのは約、半年以上前です。その時点から少しずつ準備して来ました。まずは、今までの自分の研究を網羅し振り返る必要がありました。そして、これは現在進行形である博士課程での研究にとっても大きな影響を与えました。実際アニメーション業界の方々にも率直な意見を頂き、学生さんとも普段よりもたくさん話し合いました。また、論の裏付けとなる資料も新しく見つかるなど、この発表を準備する中で今までに気付かなかった部分にたくさん気付くことが出来、私の研究はこの発表の準備を通してまたもう一歩進められた気がします。

「発表を終えて」

発表の前に練習もして、心の整理もし、また発表の前に良いアドバイスも頂いたりしました。個人的な感想としては発表は無難にきちんと収まった形で終える事が出来たと思います。発表の準備をする課程でもそうでしたが、実際に発表してからもアニメーション専攻の方々との話し合いや質疑応答を通してまた、新たに気付く事が多かったです。

結局、自分が主体となって研究を進めるのも大事なのですが、様々な人達とのコミュニケーションも研究の一環であり、そうする事で自分の研究自体がもっと豊かになれるなど感じました。これからも、今回発表を通して得た物を大事にし頑張って研究をして行きたいと思っております。また、この研究がいつか人体解剖学を必要とする様々な人たちの役に立つことが出来たら良いと思います。ありがとうございました。

(い きょんぐ/大阪芸術大学大学院)

日本映像学会第45回大会 第2通信

大会実行委員会

I 大会概要

1. 大会テーマ：「ポスト・ノスタルジー」
2. 会場：山形大学小白川キャンパス
3. 会期：2019年6月1日（土）、2日（日）
4. プログラム（予定）

第1日：
シンポジウム 未定
基調講演：調整中
パネリスト：調整中
懇親会（参加費5,000円）
第2日：
研究発表／作品発表
理事会
第46回通常総会

5. 大会参加費
会員 3,000円、一般 2,000円、
学生 1,000円

プログラムの詳細は、大会ウェブサイト及び「第3通信」（5月初旬発行予定）にてお知らせします。

6. 大会参加を希望される会員は、大会ウェブサイトの「大会申込」フォームより申し込み下さい。

大会参加の申込期限は、2019年4月26日（金）とします。

II 研究発表／作品発表申込要領

1. 研究発表、作品発表の申込資格は、2018年度在籍会員に限ります。
2. 研究発表、作品発表を希望される会員は、大会ウェブサイトの「発表申込」フォームより申し込み下さい。

発表の申込期限は、2019年2月15日（金）とします。

Eメールでの申し込み（大会ウェブサイトから申込用紙をダウンロードし、大会Eメールアドレス宛に送付）も受け付けます。
※フォーム申し込みの場合でも、Eメール申し込みの場合でも、1週間以内に受領確認のメールを差し上げます。

3. 発表は、日本映像学会理事会（2019年3月16日（土）開催予定）において承認された後、大会実行委員会が正式に受理します。
・必要事項の記入に不備のある申し込みは、無効になることがあります。
・学会の趣旨にそぐわない発表、あるいは施設の関係で対応できかねる発表は、お断りすることがあります。

4. 正式に受理された発表については、発表概要書式（800-1000字、MS-Wordファイル）をお送りしますので、**2019年4月5日（金）までに、発表概要原稿のご提出をお願いします。**

III 研究発表／作品発表について

1. [セッション]：研究発表／作品発表の時間は25分、質疑応答は5分とします。
2. [使用機材]：研究発表／作品発表には、DVDやブルーレイなどのAV機器が使用できます。持参されたノートPCを使用する場合はVGAのみ使用可能です。その他の接続方法（HDMI等）を利用する場合は変換アダプターをご用意ください。

日本映像学会第45回大会実行委員会
委員長 阿部宏慈（山形大学）
副委員長 大久保清朗（山形大学）
委員 加藤到（東北芸術工科大学）
委員 松村泰三（東北芸術工科大学）
委員 岡達也（東北芸術工科大学）
委員 畑あゆみ（山形国際ドキュメンタリー映画祭）
委員 村山匡一郎（山形国際ドキュメンタリー映画祭）
委員 日下部克喜（山形国際ドキュメンタリー映画祭）
委員 小川直人（せんだいメディアテーク）

実行委員会事務局

〒990-8560

山形県山形市小白川町1-4-12

山形大学人文社会科学部附属

映像文化研究所内

日本映像学会第45回大会実行委員会

大会ウェブサイト：

<http://jasias.jp/eizo2019>

大会Eメールアドレス：

yamagata-convention@jasias.jp

会場へのアクセス

JR山形駅東口より 徒歩約25分、タクシーで約5分

市内路線バス「県庁前・県庁北口」行きで「南高前・山大入口」下車（所要時間約6分）、そこから徒歩約7分

ベニちゃんバス「東くるりん 東原町先回りコース」で「山大前」下車（所要時間約9分）

詳細地図

<https://www.yamagata-u.ac.jp/jp/access/>

総務委員会

西村 安弘・橋本 英治

学会メールアドレス等の変更について

①これまで、本学会事務局のメールアドレスは、日本大学芸術学のご好意で、<jasias@nihon-u.ac.jp>を使わせていただいております。しかしながら、本学会のインターネット環境の整備に伴い、2019年1月15日より、次のように新しいメールアドレスへと変更します。

日本映像学会事務局 <office@jasias.jp>

移行措置としまして、今暫くは旧メールアドレスも有効にしてありますが、今後は新メールアドレスをご利用いただくようお願いいたします。

②機関誌編集委員会からのお知らせにもありますように、『映像学』の投稿要領が変更されました。従来の紙媒体での受付を取り止め、電子データでの投稿となりました。『映像学』の投稿用メールアドレスは、次のようになります。

『映像学』投稿用メールアドレス <eizogaku@jasias.jp>

③山形大学で開催されます第45回大会においても、従来のハガキ及びFAXでの参加申込みを取り止め、オンラインでの受付となります。詳細につきましては、大会実行委員会のウェブ・サイトをご覧ください。

日本映像学会第45回大会 <http://jasias.jp/eizo2019>

(にしむら やすひろ／総務委員長・東京工芸大学
はしもと えいじ／総務副委員長・神戸芸術工科大学)

編集後記

総務委員会

あけましておめでとうございます。平成最後の新年を迎え、会員の皆様には実りある1年間になることを祈念いたします。

さて、『日本映像学会報』184号(PDF版)をお届けします。大会報告を満載した前号と異なり、各研究会の活動報告を中心とした構成になっています。

「総務委員会便り」にもありますように、本学会でもIT社会への対応を否応なく迫られております。IT化の目的は、飽くまでも、事務局や各理事及び各委員の方々の過度な負担を軽減し、本学会の継続的な発展に資するものでなければなりません。『日本映像学会報』のあり方についても、こうした理念に従って、今後も再検討されて行くことになります。会員の皆様にはご理解いただきますようお願いいたします。

(にしむら やすひろ／総務委員長・東京工芸大学)